

九 突如として現れた大都市

— 全国の大名が集結した名護屋城 —

「けいらん」という和菓子を食べたことがありますか。平たく伸ばした餅の上に、小豆のこしあんを置いて、くるつと巻いた団子が「けいらん」です。浜玉町の諏訪神社の前には、何軒もの「けいらん」屋が並んでいます。

「けいらん」という名前の由来は、次のように伝えられています。今から約四百年前、豊臣秀吉が諏訪神社に参拝し、戦勝祈願をしました。その時、浜崎の人々が秀吉に団子を献上しました。秀吉は、この団子を食べたら戦に勝つまでは日本に帰らん、と言ったそうです。「帰らん」が「けいらん」と言われるようになり、今に伝わっているということです。

豊臣秀吉は、どこの国と戦をしようとしていたのでしょうか。

一五九〇年（天正十八）、秀吉は全国統一を成し遂げました。その三年前、秀吉は薩摩（鹿児島県）の島津氏を攻めるのに際し、九州の諸大名に集合命令を出しました。この命令に従わなかったり、集合に遅れた者は、容赦なく領地を没収されました。鎌倉時代から地頭として鏡庄（唐津市鏡、かがみ）を領有してきた草野氏は、その一例です。

ところが、領地を残された大名もいました。上松浦党のリーダー的存在であった岸岳城主（相知町・北波



けいらん屋（左）と諏訪神社（右）、けいらん（右下）



主な大名陣所配置図
寺沢広高や鍋島直茂、徳川家康や伊達政宗は、どこに布陣したのでしょうか。

多村) 波多親です。波多親にとって島津氏は恩人であったので、島津攻めには消極的でした。また、秀吉の力を甘くみていたことも遅れた理由のようです。鍋島直茂の秀吉への口添えもあり、波多氏の全領地没収は免れました。秀吉にとって波多氏を取り潰すのは、簡単なことでした。しかし、秀吉はそれをしませんでした。すでに明(中国)を征服しようと考えていた秀吉は、波多氏を利用した方が得策だと考えたようです。全国統一を果たした秀吉は、日本国内のことは弟の秀長に任せ、自分は明の征服計画を実行に移そうと思いましたが、中国大陸に進出するための基地として築かれたのが名護屋城(鎮西町)です。名護屋は東松浦半島の北端にあり、壱岐、対馬を経て朝鮮半島に渡るのに最短の位置にありました。また、名護屋の港は加部島(呼子町)の南側にあり、加部島が玄界灘の荒波を防ぐ壁となるおかげで、リアス式海岸の奥深い入江は天然の良港となっていたのです。

名護屋は、波多氏の家臣であった名古屋氏の領地でした。そこで秀吉は、名護屋が出兵の基地として適当かどうか、報告をするように波多親に命じました。波多親は「名護屋を出兵の基地とするのは不適當です。」と報告しました。しかし、秀吉は、後に唐津藩主となる寺沢広高らに命じて再調査をさせ、名護屋に本拠地を置くことを決めました。

築城工事には、加藤清正や小西行長ら、主に九州の諸

大名が分担任してあたりました。築城工事は一五九一年（天正十九）十月に始まり、翌年（文禄元）二月に完成したと伝えられています。秀吉が名護屋城に到着した四月までには一応は完成していましたが、築城期間は、わずか半年ほどであったということになります。東西七百メートル、南北五百メートル、総面積が十四万平方メートルで、当時としては大阪城に次ぐ規模の巨大な城が、驚異的な早さで建設されたのです。

秀吉の罰を恐れ、大名たちが完成を急がせた様子を想像してみてください。突貫工事の現場では、喧嘩が起きたり、重労働に耐えられなくなつた人夫が夜逃をしたりすることもありました。

肥前名護屋城図屏風には、五層の天守閣、三の丸、山里丸などが詳しく描かれています。また、兵庫町、茜屋町、材木町、石屋町など、現在も町名が残っている城下町の様子もわかります。京都、大阪、堺などの商人も店を出していたでしょう。港には、現代の戦艦に相当する安宅船も描かれています。

諸大名の陣屋は、名護屋城から半径三キロメートル以内に集中していました。「小早川家文書」によると、文禄の役で渡海した将兵は合わせて十五万八千七百人でした。その後も名護屋には、約十万人が在陣したといわれています。現在、鎮西町の人口が約八千人で、県内で十万人を超えるのは佐賀市だけであることを考

肥前名護屋城図屏風（佐賀県立名護屋城博物館蔵）



えると、当時の名護屋がいかにも過密都市であったかが想像されます。

常陸（茨城県）の佐竹義宣の家臣は、国もとに送った手紙の中で、名護屋の様子を次のように報告しています。「名護屋城は京都の聚楽第よりも立派です。とても見事な町です。徳川家康や伊達政宗など、全国の諸大名が野も山も隙間がないくらいに陣屋を構え、小旗やのぼりを陣屋ごとに立てている様子は、三月ごろの山々の桜の花を見ているようです。あなた方にも、せめて一目見せたいくらいです。」

軍事都市名護屋は、豪華絢爛たる桃山文化が花開いた文化都市でもありました。名護屋城の内部には、狩野派の絵師によって描かれた屏風絵が飾られていました。また、しばしば茶会が開かれ、能楽が演じられていました。秀吉は、能の練習に熱中し、大名を集めて、能を演じてみせたと伝えられています。

全国の大名が集結した数年間は、日本の副首都的な機能があった名護屋でしたが、秀吉の死後は、小さな漁村に戻ってしまいました。名護屋城は、天草・島原の乱の後、徹底的に破壊されてしまいました。

一九九三年（平成五）十月、名護屋城跡に県立名護屋城博物館が開設されました。名護屋城博物館には、日本と朝鮮半島との交流の歴史がわかるような展示物がたくさんあります。そして、日本と韓国との文化交流の拠点として、友好の前進基地となりつつあります。

名護屋城博物館から見た名護屋城跡

